

モンゴル2大学訪問記

岩 井 清 治

本年2月21日から25日まで、はじめてモンゴル・ウランバートル市の大学を訪問する機会が与えられた。この訪問は、昨年7月末に開催された経営行動研究学会全国大会プログラム中に開催された「日本・モンゴル国際シンポジウム」で筆者が行った「日・独環境保全管理」報告のおかげである。この時のモンゴル代表団にはモンゴルビジネス連合会のドルジ会長をはじめ、元首相ソドノム氏など多くの企業経営者や大学人が参加されており、毎年会場国をかえて開催される共同シンポジウムを通して多くの相互交流が促進されてきたのである。今回、ウランバートル市中心街から車で7・8分の地区に設置されているモンゴル環境大学 (Eco-Asia Institute for Environmental Education and Research : 以下エコ・アジア大学) での特別講義のことも、モンゴルビジネス連合会の紹介によるものである。またこの機会にもう一校ウランバートル文化大学も訪ずれることができた。わずかな経験ではあるが、得られた内容をご報告して、このような機会が与えられたことに対する感謝の気持ちに代えさせていただく次第である。

*

「エコ・アジア大学」への訪問は2月23日、副学長で Executive Director のエアデネトックス教授から直接、大学の理念、教育方針、専攻概要の説明をしていただいた。

本大学は、2000年の設立、創立者・学長のアドヤスレン教授(Ph.D)及び副学長エアデネトックス教授がともにモンゴル自然環境省出身のもと官吏で、「モンゴルの自然保全活動と自然環境保全監視人養成」の必要性を実感され、「自然環境保全管理専門家養成」を目指した大学の設立を政府に提案、同時に私的な財産を提供して本大学の開設を実現した、との説明がなされた。専門課程のカリキュラム編成は以下の5コースに配置されている。1. 環境経済学分野 2. 環境法分野 3. 環境汚染測定分野 4. エコ・ツアー分野 5. 土壌マネジメント分野である。昨年6月に第1回卒業生を送り出したところで、今年9月には新たに森林工学分野コースの開設を予定し、そのための増設準備と規模拡大にむけた土地購入をすでに実現しているとのことである。積極的に環境保全分野における人材養成、専門家養成への貢献を目指していることが明らかである。また、海外の大学との提携にも積極的に取り組む方針を持ち、アドヤスレン学長はそのため海外に出張中であるとの事であった。このことは、さる2月5日に東京・アジア会館での打ち合わせでアドヤスレン学長に筆者がはじめて面会させていただいた時にすでに伺っていたことであったが、海外との交流を積極的に進めるといふ本大学の姿勢が強く感じられた。

ところで、本大学の特徴の一つを規模の面から見るることができる。昨年6月に行われた第1回卒業生総数は29名、現在4学年次在学学生46名、3学年次生45名、2学年次生45名、第1学年次生44名、在籍学生の総計は180名である。第1回29名の卒業生の進路は、20名が自然監視員の資格をすでに取得して公務員として就職、9名は就職しないままウランバートル市内での生活を続けているとのことであった。就職後は原則として地方に配置されるためそれを嫌っての選択であるという。いずれにしても、本大学での卒業後の進路はほぼ約束されたものとなっているということである。また、教員数は20名、内6名が教授職、14名が全員修士号取得の講師職、教科では、専門科目の他に外国語が重視され、英語・ロシア語の2ヶ国語が必修、選択科目には日本語、中国語、韓国語があり、数学、統計学、地理学、コンピューター等の科目も設置されている。

学費等では、授業料年間約3万円、入寮費1万円、毎月の食費・寮費約1500円、教員の給与は、月額約1万円から2万5000円とのことであった。大学の運営は20名からなる理事会で行われ、理事の中には授業担当を兼任する人もいるということであった。教員の授業担当時間は平均的に一週間に90分を7コマ、教授は5コマ、学年は2学期制で、9月1日からの第1学期、16週間、2月1日からの第2学期16週間、として運営されている。また、筆者の関心ごとである実習授業の実施状況では、3ヶ月続く夏休み中1ヶ月間が実習授業日程に組み入れられ、しかも全員必修であった。

上の内容は、特別講義の翌日に再度訪問した時に講師の先生方との会話で知りえたことであったが、講師の先生方の多く

は年齢が若く、新生大学の活気のある雰囲気講師室に満ちあふれていた。

筆者にとって肝心の特別講義の方は、およそ70人教室ほどの会場に、長机に5人ずつ詰められて、この小規模大学としては大人数、100名近い学生が出席してくれた。90分の「ドイツ環境保全管理人材養成」報告の後、学生だけでなく先生方からも質問が多く、環境問題への関心の深さを知ることができた。

＊ ＊

次に訪問させていただいた大学は、「ウランバートル文化大学(Ulaanbaatar-Erdem-Oyu University)」で、上記モンゴルビジネス連合会ドルジ会長が理事長、設立は1996年、来年10周年を迎えるという大学であった。本大学は、学生総数1600名、分校2校を擁している。将来の新キャンパス用に隣接地を購入済みで、学生数を2000人規模にする計画である。学部教育は経済学専攻、観光ビジネス専攻、ジャーナリズム専攻で、いずれもその分野の専門家養成を目的とし、修了時の取得学位は学士(Bachelor's diploma)である。教科では外国語に日本語、中国語、英語が選択でき、コンピューター・スキルの学習にも力が入れている。学士課程では4年間と2年間の2方式があり、修士課程も1年コースと1.5年コースの2方式が提供されている。博士後期課程は未設置のため国立モンゴル大学の後期課程に進学を勧めるという。その他、社会人向け生涯教育、カルチャー教育の教科も提供されている。日本語学習者も多く、日本語能力検定で2級か3級の内容、専攻専門科目と非専攻科目の比率は67%と33%とのことであった。本大学での授業料は、年間350USD、それに入学金が

300ドルである。また、本大学での特徴も、国際交流への姿勢を挙げることができる。例えば、ロシア連邦やインドからの学生・教員間の交流、ネイティブ外国語教師の配置、さらにチェコの大学との交流も近い将来実現されると言う。

日本語専攻クラスでは学生からのインタビュー攻めにあったが、質問の多くは、日本への留学の可能性についてであった。学費、生活費、日本語入学試験の内容、桜美林大学での具体的な金額・数字が多く問われた。それだけ海外留学への関心が高いということである。また、こちら側から質問させていただいた実習授業については、全ての専攻分野で必修制が採られているという回答であった。経済学・経営学関連の授業では、国際経済、簿記、銀行業務、情報システムマネジメント、観光マネジメント、鉱山工学マネジメント等の教科が置かれ、その他ジャーナリズム関連授業、さらに日本語通訳、英語通訳、中国語通訳等の職業専門的授業も開設され、各分野での専門家養成教育が行われている。

以上、モンゴルでの2つの大学訪問の概要であるが、もともとモンゴル国には国公立、私立の University と College、Institute を合わせて183大学が設置されている(モンゴル統計年鑑2003年)。学生総数は10万8500人。従って、単純に平均化すれば1大学での学生数はおよそ600名となる。つまり、モンゴルでの高等教育機関はかなり小規模で、しかし多数の教育機関において高等教育が実施されていることが分かる。ただ、総人口253万人(2000年)、にたいして11万人近い高等教育学生数という比重の高さは、いかなる理由によるものであろうか。因みにイギリス

は170大学(2003年)である。しかもモンゴルは、高齢化社会には程遠い若者国家であることも間違いない。0歳 14歳までの人口合計89万1000人は、総人口の36%、65歳以上人口の総人口に占める割合は、わずか4%に過ぎない。日本とは極めて対照的な人口構成なのである。若者人口が非常に多いだけでなく、学生・生徒数はほぼ毎年増加している。上の2つの大学がいずれも将来の拡大を計画している理由もそうした社会的背景から理解することができよう。

環境保全面での印象では、ウランバートル市内における大気汚染の問題が心配されているが、特に厳冬期には、都市の集中暖房のための石炭燃焼と自動車の急増、古い年式車の走行にともなう排気ガス問題、さらに人口急増にともなう水不足、特に井戸水の枯渇と水質汚染の課題、下水道施設の整備の必要性等々が課題となっている。そうした背景の中で、国の環境保全対策も導入され、2004年には、森林・水質資源調査センターの設置、廃棄物処理法は11月に施行されている。上のエコ・アジア大学という環境関連大学の設置もそうした社会的要請のもとでなされたことは間違いない。

最後に、2つの大学の特徴として印象深かった点は、2大学とも、実習教育にかなりの授業時間が当てられており、しかも職業人養成・専門家養成教育に高い比重がおかれているということである。今後、学生交流プログラムが積極的に導入され、語学・異文化学習プログラムに加えて、モンゴルの大学における実習授業、企業インターンシップ研修授業等々の機会が桜美林大学の学生にも与えられることを切に願う次第である。